

# 日本在宅 医学会 雑誌

Vol.2 No.1

## The Japanese Academy of Home Care Physicians

●卷頭言

病気は家庭で治す

佐藤 智・1

●第2回日本在宅医学会・特別講演

これからの医療に想う

森 亘・2

●第2回日本在宅医学会・基調講演

EBMの手順と意義

福井 次矢・9

●第2回日本在宅医学会・シンポジウム

在宅時におけるEBMの確立のために

石川 鎮清, 他・17

●特集

在宅における栄養評価と栄養投与

宮澤 靖・34

●研究と報告

肝癌の在宅末期医療

竹越 國夫・39

日本在宅医学会雑誌投稿規定.....43

日本在宅医学会・入会申込書.....47

日本在宅医学会会則.....44

編集後記.....48

日本在宅医学会・実績一覧.....46

日本在宅医学会

◆卷頭言

# 病気は家庭で治す —oportet morbus domi curali—

佐藤 智 日本在宅医学会会長



表題にかかげた oportet morbus domi curali (ラテン語) は「病気は家庭で治すもの」 という意味のモットーであり、昨年もこの巻頭言に掲げた西欧の古い諺である。

この学会の2年目にあたり、あえて同じモットーを掲げる意味は、まさに今こそ日本の医療が問われている大きな課題であるからだ。われわれ医療者は「目の前の患者さんの治療の場は本当にどこなのか」を厳しく問われている。果たして病院なのか、自宅か、施設か、とくに高齢者の場合には、患者さんも家族も医療者も、そして福祉関係者も困難な選択を迫られている。

病院医療費の高騰は世界各国の大問題で、入院期間を短縮する傾向はどこでも顕著である。日本の場合もその例外ではない。アメリカをはじめ先進国では、早くから入院期間短縮計画とともに「在宅医療、在宅ケア施設」の充実を図ってきたが、日本は大変に立ち遅れている。

日本でも今年の4月から、漸く全国規模で介護保険制度が施行された。現行の規則や実施面で不都合な点はいろいろあるが、行政も国民もこの制度を「自分たちのもの」にしてゆかないと、禍根を永久に残すことになるであろう。英国では100年前にこのような課題に取り組みはじめたが、日本では最近のことであり、しかもあと20年たつと日本は世界で例を見ない超高齢化社会になることは確実である。今や在宅医療、在宅医学の重要性は計り知れない。現在私どもは高齢者の在宅ケア、在宅医療に直接関わっていると日常的にそのことを肌で感ずる。

私どもは現在東京の都心部（千代田区水道橋）で、3人の医師と訪問看護婦などのチームをつくり、高齢者在宅ケアを中心とする会員組織（ライフケアシステム）とクリニックで働いている。20年前に数十人の患者さんが集まり、「24時間いつでも医師に連絡のつく方法を考えてほしい、そのためには会費を集め」と言われてこの組織が始まり、われわれ医師たちがポケットベルを持ちはじめた。現在は65歳以上の方は約300人、その約半数の方は訪問診療を要する方である。介護保険で介護を受けておられる方は数十人に及ぶ。現在までに末期がんの在宅ターミナルケアで看取った方は100名近くで、そのうち病理解剖をさせていただいた方のことは昨年の本学会で報告された。

介護保険についていえば、医師意見書は約70枚書き、具体的に介護保険実施に関わっているが、今まで市町村などの経費で行われて来たケアをいかに介護保険でカバーするかということに相当な労力をとられている。ともすると、「長年住み慣れた自宅で静に生涯を閉じたい」「病気は家庭で治す」という原則を「外からの制度」で変えさせられるのではないか、という懸念がある。

ここでもう一度、oportet morbus domi curali の意味を学問的に問い合わせるべき重大な時にきている。この学会の更なる発展を切に願うものである。